

交換の原理

—その社会学的分析—

渡植彦太郎

資本主義経済体制内では商品の交換を前提として、財貨および用役の生産と配給とが営まれていることは疑うことが出来ない事実である。したがって又、資本主義体制の確立とともに、この商品の交換の基準を提供する経済価値が、その経済理論においても頗る重大な地位を占めるに至っている。このことは、古典派経済学は勿論のこと、限界効用学派、更にマルクス主義経済学も亦、その例にもれないのである。

事実又、資本主義体制下のわれわれの日常生活を顧みても、その交換はこの経済価値を基準とするものが圧倒的であることを見出すことは少しも困難ではない。交換といえば直にこの種の交換に思い及ぶのがわれわれの实情である。しかも、少しく立入って分析して見ると、われわれの日常生活での交換の中にも案外にこの種の交換ではないものが、すなわち、これとその質を異にするものが含まれていることに気付くことも出来る。更に、資本主義体制の支配的でない社会ともなれば、却って、この種の交換が絶無であるか、或は又存在していても、それは例外的でしかないということも見出し得るのである。

但し、資本主義的経済理論の多くは、資本主義体制の支配的でない社会内にさえ、この種の交換をさかのぼっ

て読み込もうとする傾向が強い。これは資本主義や資本主義精神を古代、中世の世界に読み込もうとする立場と相通するものがあるといえるであろう。¹⁾

小説家は近代的恋愛を古代や中世の生活に読み込むことによってロマンスを語る。しかし、それは飽く迄もフィクションであることよって当然許される。しかし、経済学はフィクションではないから、資本主義社会に特有の交換をそのままに、それ以外の社会に読み込むことは大きな問題であるといわなければならない。

一方又、資本主義社会に生活しているわれわれはその日常生活において、この種の交換に大きく支配されていることは前述の如くであるから、上記の経済学者のフィクションに容易に引き込まれて仕舞う。曾て、マルクスは古典学派の用いる孤立生産者による説明方法を十八世紀の生んだファンタジーロゼ・アインビルドゥングと呼んだけれども、²⁾資本主義的交換を唯一のタイプと思いつくことはこれと相去ること遠くない。現にアダム・スミスも亦、この種の交換が人間の本性に根差すものとさえ考えた位である。

ここに交換の原理の社会学的分析を試みようとする意図は、この資本主義社会に特有な交換は、他の社会体制下の交換といかにその性質を異にするものであるかを明かにするとともに、資本主義体制下での交換も、必ずしもこの種の交換によって一色に塗り潰されてはいないし、又仮りにそうなり切る場合には必ずやそこに人間生活上の大なるフラストレーションが発生する筈であり、又それによってわれわれの社会生活が大きく損われる所以を示そうとするものである。

人間は社会生活を営むことにおいて、始めて人間として生きて行くのであるから、その生きるための生産も亦当然社会的生産である。そして、いかに原始的なものでも社会的生産を営むには、物質でないとしても、少くともそこに用役の交換関係は成立している筈である。そこには亦言語を媒介とするコミュニケーションが存在していることも、そのような用役の交換関係と相表裏している。但し、その場合の交換関係は勿論アダム・スミスの想定したような孤立して生活する個人との交換ではない。むしろ一つの共同生活体における扶け合いという意味の交換として出発したものである。すなわち、個人としての人間が予め自己の私的所有物を有し、これを交換し合うのではなく、共同所有の中で生きて行くために、自己の果し得る用役を提供しあって、扶け合いながらその共同体の生活を支えて行くという意味の交換が最初である。これを仮りに相補的交換と名付けておこう。勿論このような用役の交換は、予め自己の提供する用役と相手の提供する用役とを比較評価の結果行われる訳ではない。それは交換する当事者たる個人のための交換というよりは、寧ろ、共同生活体が生き延びて行くための交換である。したがって又、それは個人間の交換ではなく、それぞれの個人とその共同体との間の交換といった方がより適切であるかも知れない。すなわち、個々人の用役又はその生産物は一先ず共同体全体に提供され、個々人はそれぞれのその働きの反対給付を共同体から受取ると見るのが本当であろう。これを個人間の交換のごとく考えるとすれば、資本主義社会の交換を共同体社会のメンバーとしての個人間に逆に読み込むことになる。しかもこの相補的交換が、資本主義社会体制内でも、その資本主義的交換の圧倒的優勢にもかかわらず、われわれの日

常生活の中に案外根強く生き残っているのが稍もすれば見落されるのである。例えば、非常に親密な友人の間で、円満な家族内部で、夫婦の生活で、この種の交換は殆ど気付かれることなしに行われている。すなわち、親密な友人間では用役は勿論、物質的なものも互に分ちあうであろう。それは円満な家族の内部ではいふ迄もなく、凡そ夫婦関係も実はこれなくしては円滑には運ばない。それは互に相手を扶け補いあう意味での用役と物質との交換である。それなくしては、親密な友人関係という集団、家族集団、そして夫婦という集団を安定した状況の下に維持して行くことが出来ないのである。

勿論そこには愛情、義務意識が、そして責任感が、それぞれの個人に抱かれていることは当然ではあるが、そのような意識を予め個人が抱いているからという丈で集団の安定が維持されるのではなく、そもそもその集団内に相補的交換が実質上行われていることが先であって、その逆ではない。観念論者と共に支配階級はしばしばその逆の考え方を抱くことによって、その集団の安定を確保しようと企て、しかも必ずしも、否、必然的に成功しない。寧ろ、集団の安定が或る種の危機に迫った時その集団の個々人にそのような意識が呼びさまされることが要求されるといってよいであろう。しかも、それはそもそも相補的交換の行為が立した個々人の意識から出発するという誤った観念論的前提に立っているものである。

勿論、現代の資本主義体制下では親密な友人関係において、家族内において、そして、夫婦の間においてさえも、この相補的交換が順調に運ばれることを妨げる要因はいくらでもある。すなわち、これ等の集団の中に資本主義的交換が、後に述べるように、遠慮なく侵入して来ている。そのために、曾ては存在した友情が日に衰え、家族生活は崩壊の危険に見舞われ、離婚の数も益々多きを加えている事実は認めなければならぬ。⁴⁾資本主義体制下に生活している以上、資本主義的交換が友人関係、家族内、さては夫婦間に侵入することを阻止するのは到

底不可能であることから、むしろ、その本源である資本主義体制そのものを一掃することの方が早手廻しとも考えられる。例えば、中国の共産主義体制下ではこの資本主義的交換関係がすくなくとも、大きく後退していることが、その乏しい物質生活を支える一つの力となっていることを見逃す訳には行かない。この意味で、その生産性の低さという側面丈で、中国の経済生活を評価することは出来ない。⁵⁾

一方又、資本主義体制そのものを温存する場合、この体制内でさえ、相補的交換の機能をどれ丈生かして行くことが出来るか、逆に資本主義体制が一掃された場合、或はその過渡期においては、この資本主義の生み出した交換関係を何等かの意味で生かして行くことが出来るか、も亦大いに考慮に値する問題である。

二

前節で述べた相補的交換は、そのみが支配している場合は、一方が相手方からの交換を俟たずにはその生活が維持し難い程生産力の低いことを示している。したがって、勿論そこには生活上の余裕は見られない。これに対して、今一つの前近代的タイプの交換として、仮りに、贈答的交換とも称し得るタイプの存在を認めることも困難ではない。これは資本主義的交換のように個人の合理的計算の上で成り立つものでないことは相補的交換と同断ではあるが、さりとて、これなくしては社会生活の維持に支障を来すというものではなく、いささかの余裕を存して、生活がそれによってより快適となるものである。すなわち、その場合は一応自己の所有するもの、或は自己の果す用役を相手に対する愛情又は好意の表現として提供し、それと引換えにこれを受取る。提供する物質又は用役には自己の人格が十分に浸み込んでいるがゆえに、自己の人格の一部を相手に提供することとなり、

それは当人の愛情と好意とその物質なり、用役なりと離れ難く結びついて居る。これに答えて、物質なり、用役なりを報ゆる場合も勿論同様である。但し、それだからといって、それは交換である限りは、互いにその反対給付を予め期待しないのではない。期待はしているが、その反対給付は、又必ず相手の人格の浸み込んだ物質と用益であることに当然限られている。物質的な交換と人格的結びつきとがいわば一体となっているのである。このタイプの交換が前近代社会では、稍、余裕のある階層において行われていたことを見出すことは容易であるが、たとえ余裕の乏しい階層においても亦、それが、その社会の秩序を乱さない程度においては、当の個人の犠牲において行われてさえいたのである。この交換も亦資本主義下の現代生活内にも、親密な友人関係の中に、家族の中で、又夫婦の間にも見られないではない。友人間に、親子、兄弟、夫婦の間で、その誕生を記念として行われるプレゼントはこの名残りを止めていると解することが出来る。しかし、資本主義体制下ではこの贈答的交換も亦、資本主義的交換によって侵され、或は大きく損われてきていることは止むを得ない。本来、それは当事者間の愛情と好意との表現と深く結びついていることは前述の如くであるから、交換される物体と用役には、互の当事者の人格がいわば一部乗り移っているものでなければならぬ筈である。逆に、この物体と用役とは当事者以外の第三者には必ずしも何等の価値もないものでもよいわけである。したがって、幼児が蒐集したボロ切やガラクタも亦彼等の間ではこの交換の対象として重要な項目をなすことを妨げない。自己の愛着するものを相手に供し、相手の愛着するものを贈られることが又それに十分に報われる所以である。相互に贈られたものに、例外的に同じ事情が、人を換えて発生しない限り、これを手離すことはない。例えば、亡き母親から贈られた、今は何の価値もないと思われる指輪なり、時計なりを愛人に贈るような場合がそれである。

ところが、資本主義体制下の贈答的交換の名残りに、自己の愛着する、而してその人格の一部となっている

物品以外の商品が代用されることが益々多くなっている。事実、資本主義体制下では例外の場合以外は物品の入手の手順が殆ど商品を媒介としているのであるが、それにしても、これを永く愛蔵して、それに人格の一部が浸み込んでいる場合もある筈であるが、そのような経過をとることなく、商品そのものがそのまま贈答的交換に用いられるに及んでは、この交換本来の面目は大きく損われることになる。しかも、この場合でさえも、その商品の価格に囚われず、商品の価格ではなく、財貨の品質を自己の見識において吟味して贈る場合は、尚そこに十分に本来の贈答的交換の性質を留めていると見ることも出来る。しかし、商品の価格丈が贈答の要素となるに及んでは、贈答的交換の実質は全く失われて仕舞っているのである。

尚、前述の如く、前近代社会では資本主義的交換が多くの場合、例外的にか、或は部分的にしか存在していなかったことと関連して、贈答的交換が一見それと見分け難い形式で案外に多く存在していたことを見逃してはならない。例えば、支配者と被支配者、保護者と被保護者、師匠と弟子との間の関係がそれである。勿論、これ等がそれぞれ墮落した形態において、パターンリズムと呼ばれ或は又、搾取関係と称せられてよい側面が存することは否定出来ないが、このような形態のみではそれ等は到底社会を永く支える力はない筈である。例えば、わが国封建社会下の主従関係のごときも、それが相当永きにわたって円満に維持されて行くには、単なる権力関係の支配では不可能であったと思われる。そこには何等かの恩顧、という一種の人格的結び付があり、一方の奉仕と他方の恩情という、用役と物質との贈答的交換が自ら発生していたと見なければならぬ。勿論その時代のイデオロギーがこの関係を実質以上に美化することに努め、その支配関係を強化することに相当成功したことは認めなければならないが、この恩顧的關係が絶無となり、或は稀薄化する時、そのイデオロギーの努力丈で、その崩壊を支えることは不可能である。そもそもそのようなイデオロギーの発生自体が実は恩顧關係の弛緩という危機の

産物であるとも解し得る。⁶⁾

尚前近代社会には近代社会では到底見ることの出来ないいわゆる残酷物語りの存在したことをわれわれは知っているが、一方又、近代社会には見られない恩顧関係も亦存在していたことはわが国の場合でなく、司馬遷の描いた史記の世界においてこれをよく窺うことが出来る。例えば、その「刺客列伝」の如きはその残酷物語りの側面と恩顧的關係とを合せ伝えて余すところがない。

このように、前近代社会の贈答的交換は、商品の媒介を俟たないという点で、資本主義社会特有の交換と凡そその質を異にするものであることを理解するのは容易である。しからば、以上挙げた相補的交換、および贈答的交換と全くその質を異にする資本主義特有のタイプの交換の特性とはいかなるものであろうか。

三

近代資本主義体制下の交換とは端的にいえばそれは商品の交換である。⁷⁾ 経済学の文献の多くはこの資本主義的交換と上来述べ来た前近代的交換との質的区別について十分明確な自覚を示していない。それはこの資本主義的交換を以て、交換のもっとも進歩した、且つノーマルなものと思ひ込んでいると共に、逆にこのタイプの交換を以て、前近代交換をも律しようとする傾があるからである。その上に、商品交換は、原始共同体社会においては兎も角、古代、中世の階級発生後の社会では少くとも部分的には既にその発生を見ているのであるから尚更である。⁸⁾ しかし、この種の交換は当時社会的に卑められ、又これを専業とするものも亦卑められていた事實は、それがこの社会で支配的なタイプではなかったことを示している。

この間にあって、マルクスはその資本主義的経済体制の批判に際して、先ず商品の分析から出発していることは、彼が商品交換と資本主義体制との特有の結付をいかに深く認識していたかを示すものである。マルクスは商品にはそれぞれ同質の社会的労働量が投下されていることによってその交換が成立するとしていることはよく知られているところであるが、この労働は抽象化されていて、その質的相違を脱却しているものであることが重要である。すなわち、その労働支出者の直接の必要を満すために投下されているものではなく、いわゆる社会的欲求を充足するためのものである。したがって又それは予め交換されることを前提とする財貨又は利益に支出される労働なのである。すなわち、商品の生産のための労働に他ならない。

ところで、商品はその生産者にとっては、直接消費の対象ではないのであるから、その商品が売れることが前提条件である。売れない場合は余裕のない生産者は忽ち生活に窮する。商品が売れて、これを自家消費するより有利である場合もあるが、売れない場合もあるから、商品生産は何程か生活の余裕を持つとともに、商品の販売によって利するところがある生産者文がこれを手掛けることになる道理である。事実においても、中世末期から商品生産が漸く支配的になって来たのは生産力の上昇とともに生活を支える以上の余裕を持った階層が増大して来たからであることを経済史は示している。

但し、資本主義体制内では賃金労働者は形式上は生産に従事しているが、決して生活に余裕を持っている訳ではない。それどころか、むしろ、生活に窮してその労働力を資本家に売っている中で、資本家がこれを買取って、他の生産要素と結びつけて商品の生産を行っているのであるから、賃労働者は生産要素の一つの提供者乃至はその売り手ではあっても商品の生産者ではない。生産の主体である資本家は商品生産を行わないでも生活に窮することのない丈の余裕を持つ人々である。たとえ、資本家でない単純商品生産者であっても多少の生産手段

を所有し、自家消費のため丈でない商品生産を営む以上は、単なる生活を支える以上の利を求めての生産であることに変わりはない。

このようにして生産された商品は生産者の所有に属することは当然ではあるが、この所有物たる商品に対して、彼等は原理的には何等かの愛着を持つような人格的結び付がある訳でもなく、又それなしには自己の生活が支えられないものでもない。むしろ商品としての所有物は或る条件の下で喜んで手離すことを辞さないものである。前近代社会ではこのような事物を所有することがむしろ例外でしかなかったことが商品生産も亦例外でしかなかったことと関連している。商品とはこのような意味での近代的所有の対象に他ならぬことを私は他の個所で述べたのであるが、かかる商品又は財貨の所有を保証することが又近代社会における所有権の本来の意味でもあることは見逃してはならない。¹⁰⁾

前述の如く交換の質が前近代社会と近代社会とでは大きく異なることに対応して、その交換の対象についての所有の意義も亦異なることも亦他の個所で詳説したので、ここでは詳しいことは差しひかえるが、前近代社会ではその所有物と所有者との間には何程かの人格的結び付が存したことが少なくとも原理的には認められていたのであって、その意味からして、それは容易に他に犯されることを自らも防衛し、又社会もこれを保護するに吝かではなかった。例えば、中世の農奴や日本の封建時代の百姓は形式上はその土地を領主から貸与されていたとしても、実質上はその所有に属していたので、その土地に対する執着は近代的所有の対象に対するものとは到底比較にならない。その住家についても亦同様のことがいわれる。これに対して近代社会での所有権の保証はいわば、その対象の経済価値の保証であって、その対象物そのものの保証ではない。¹²⁾これはその所有の対象を経済価値を持つものとして、したがって商品として、所有する人々に頗る有意義の保証ではあるが、自分と人格的結び付を持つ

対象の所有者にはその保証はないより増しという程度のものである。前近代的所有の対象には所有者の人格が浸み込んでいるので、対象として掛け替えないものであるから、金銭的に代償されるといふものではない。贈答の交換の場合のように、等しく人格の浸み込んだものによって漸く報われる訳である。前近代社会では、「目には目を、齒には齒を」という復讐の慣行の有したことからこれは密接な関連を持っている。その場合失ったものが肉親の生命であることから、これを所有の対象と考えることが、近代的所有の觀念からは頗る奇異に感ずるが、それは近代的所有が所有者の人格との結付を離れているので、逆に、人格的に結びついたものの所有が近代的觀念には受け入れ難いのである。逆に近代的所有觀念からは不合理と考えられるものが、前近代社会にあって何不都合もなく所有の対象となり得たのである。極端な例としては当人の影が所有の対象として怪しまれなかった場合もある。¹³⁾

四

資本主義的交換が商品の交換に他ならぬことから、かかる交換の前提となる近代的所有の意義も、この交換の基準となる経済価値も共に近代社会に特有のものであることを述べて来たのであるが、所有そのものも、所有物の評価も共に前近代社会にも亦十分見出すことが出来るという事実が近代的交換の特質を曖昧にして来たのである。

たしかに、所有自体も、所有物の評価も、これを抽象的に理解する限りは、人間社会のいかなる時、いかなる場所にもこれを見出すことが出来るであろうが、所有について見ても、前述のごとく、未開人の社会では当人の

影がその所有の対象となるに到っては所有の意義が社会を異にするに依じていかに大きく相違しているかは明らかである。

所有物の評価についても、二つ以上のものが与えられた時、その一つを取り上げることにおいて既に評価を認めるのであれば、人間の社会はおろか、少しく知能の発達した動物にもこれを認め得るし、下等動物のトロピヅム迄も評価に算え上げられるかも知れない。しかし、人間の評価は飽く迄も社会的創造物であつて、たとえ、個人が自主的に評価を下したと意識していても、又事実そうであつても、その評価は所詮、その個人の所属する社会の規定を蒙っていることは現代社会学の等しく認めているところである。

所有についても、個体の肉体的能力で事物を保持しているという自然的事実は所有ではない。¹⁴⁾ 所有とは何等かの意味で、その個人の所属する社会の承認を経たものである。このように、所有も評価も共に社会的事実であつて自然的事実ではないのであるから、社会が異なるに依じて所有の意義も、評価も共に大きく変動することは怪しむに足りない。

かくて、近代的所有も亦全く、資本主義体制と相呼応するものなのである。この点をもつとも典型的に示すものとして株式組織による企業を上げることが出来る。株式企業は法人格を取得して、企業資産の所有者であり、商品売買の主体ともなるが、勿論自然人格を所有するものではない。このような法的な人格に過ぎないものが所有の主体となるというが如きは前近代社会では到底理解出来ないことではあるまいか。¹⁵⁾ しかも、株式的企業はその事業経営に当つても、有限責任という特権を得ている。一個の自然人格であつたとしたら、これは全く許されない無責任の沙汰である。その上その企業の株の所有権は株主にある。株主は勿論これに対して何等の人間の愛着を持つことなく所有していて、自由に売買の対象としている。それはきまつた配当を受けるための権利保証で

あり、利益があればこれを何時でも売り放つ手段としての所有の対象でしかない。このような所有の在り方は勿論前近代社会にあつては、絶無か又は異例のことである。

このような所有物が交換の対象となるということは、等しく交換といつても、既に述べた前近代社会の交換とは全くその質を異にすることは当然であるが、又このような交換にして始めて、その交換される対象の双方に共通な同質性が十分認められもするのである。それらは何れもその所有者から人格的な或る距離を持っていて、最早その人格の一部でも何でもない事物、用益であるから、それに対して所有者は或る価値を認めてはいても、その評価には同時に或る種の客観性が存する。曾て、左右田喜一郎博士はかかる消息を示すものとして愛着価値から出発して対象価値を経て手段価値という表現に到着した事がある。¹⁶⁾ 手段は目的に対して一步遠ざかっていることはたしかである。しかし、その手段にして特定の目的達成に欠き難いものであるなら、手段はその目的から自由引離される訳ではない。その手段により達成される目的そのものが、既に掛け替えない対象でなくなっている限り、手段も亦十分に距離を置いて客観的に評価出来る。博士が経済価値の客観性を求めて、その愛着価値から発生の経路を先験心理学的に分析し、そこに手段価値を見出したことは理解出来る。しかし、商品交換の基準たる経済価値の客観性を単に手段価値に求めることは尚不十分である。すなわち、経済価値を手段価値に求める限り、これにより媒介される交換は、自給自足以上に人間の経済生活を向上することは出来ても、到底近代資本主義の止まるところを知らない資本の蓄積への欲求を解き明すには不十分であろう。すなわち、交換が消費生活の潤沢を求める人々間により行われる限りは、近代的意味での所有を飽くことなく追及する資本主義の成長はあり得ない。又一方、資本主義発展の促進力が消費生活の潤沢への追及に止まるものでないことは、マックス・ウェーバーが別の角度からもプロテスタントの倫理と資本主義の精神との関連を示したことによつても、窺い知

ることが出来る。資本主義体制の形成を促進した人々は必ずしもその消費生活の潤沢を求めたのでなく、その天職とするところに励むことにおいて、その成果としての近代的所有の増大を来した。結果として、この人々がそれぞれその生活の潤沢度を増したでもあろうが、その所有の増大と消費生活の向上とは必ずしも比例を示しはしなかった。否むしろ後者は甚しく質素であったといわれている。

一方、この資本家的生産者のお陰で、その交換を通じて、消費生活の向上を見た階層もありはしたが、それは、この交換に応ずる丈の近代的所有の裏付が又必要であったことを見逃してはならない。したがって、それは、国民の一部でしかなかったことも認めなければなるまい。困い込み運動によって土地を追われた浮浪者達、後に無産者として出現する賃労働者は到底、近代的交換を通じて、その生活の向上を期することは不可能であったのである。この意味において、近代的交換は全社会の一部の人々、即ち、近代的所有に恵まれた人々にとっては大きな意義を持つものではあっても、他の部分の人々にとってはそれは必ずしもその意義を持つものではない。

六

資本主義体制において支配的である商品交換が以上述べた如き性格のものであるにも拘わらず、多くの資本主義経済学の文献はこのタイプの交換を以て、もっとも進んだものと見なす丈でなく、これを欠いては、資本主義体制は勿論、人間の経済生活は大きく損われ、従ってこれを欠く場合は当然人間の経済生活は後退すると見なしている。たしかに、今日、未開民族や後進国の社会ではこのタイプの交換を殆ど欠いており、或は不十分にしか発達していないし、且つ又、彼等の経済生活が恵まれるところ少ないことも事実である。しかし、その恵まれな

い生活状況の原因が果してこのタイプの交換の未発達にのみ存するか否かはにわかには断じ難い。それは、かかる交換によって、或る意味で繁栄しつつある先進国からの干渉或はそれとの接触の結果であるかどうかとも亦大きな疑問である。例えば、アメリカの社会学者のステュアート・チェイスの「アメリカビジネスの罪業」の中で、後進国が経済生活では形式上恵まれない儘に、平和な生活を営み、アメリカではその経済生活の外見上の繁栄にかかわらず、いかにその庶民が不安の日常生活を送っているかを描いている。¹⁷⁾ 資本主義的自由主義の国々は、資本主義的交換を制限する社会主義の国々の所得の低さを、そしてその自由の欠如を指摘するに急であるが、その所得の基準も、その自由も共に、彼等の資本主義的交換の基準からのみ計っていることを忘れている。これらの国々が社会主義体制の故に何を獲得したか、又何を失ったかは、資本主義体制の基準では必ずしも計ることは出来ない¹⁸⁾のである。

一方又、資本主義的体制下の賃労働者達は資本家からの搾取を阻止する目的で組合運動を通じて対抗しているが、賃労働者が資本主義特有の交換関係に引込まれている限りは、それによるマイナスを取り戻すことは出来ない。すなわち、組合運動が経済闘争に止まる以上は、賃労働者はこのタイプの交換の当事者としての地歩を多少とも有利にすることは出来るかも知れないが、その交換関係で獲得したものは所詮、彼等の生活の向上に直結し難いという事実は動かない。この点については、賃労働者を含めて、一般消費生活者全部もまた同様である。

勿論、一般消費生活者の中には大企業の生産者も含まれているので、彼等は消費者としては失うところがある。彼等は社会全体の何パーセントかに過ぎないが、いわゆるパワー・エリートとして、資本主義的交換の支配する社会をリードし或はこれを操縦している。したがって、又、彼等以外の社会の大部分の人々はその社会生活におい

て自分のペースを持っていない。近代的交換の支配する社会は近代的所有の増大を業とする一部の人々のペースによって運行している。その結果当然に、社会の大部分の人々が、オーガニゼーションマンとなり、ホワイトカラーと化し、更に孤独の群衆人となり果てるのである。¹⁹⁾

資本主義体制下に特有な交換は商品の交換であると前に述べたが、商品とは又近代的所有の対象でしかないのである。ところが、資本主義体制下ではこの商品の媒介なしには、殆どわれわれの消費生活は支えられなくなっていることも事実である。したがって、われわれは生活の必要上否応なしにこのタイプの交換に引込まれて行くが、上述のように、これを通じてその近代的所有の増大を計っている人々を除いては、それはむしろ、必要悪といってもよい。このタイプの交換によっては、われわれの消費生活は偶然にしか充足されない。それは、われわれ自身の消費生活の実体を少しく反省して見るならば思い当ることである。われわれの日常生活に必要と思いつているものの中、一体どれ丈が自分の肉体や精神の向上に資するものであろうか。その大部分が企業的生産者のセールスマンシップによってかき立てられた欲求の結果ではないか。むしろそれによって、真の生活向上のための必要が抑圧されているのではないか。大企業の生産者達は社会への奉仕を歌い上げているが、サービスへの要求そのものを彼等が造り出していることは明かである。しかも、大企業はその寡占を通じて管理価格により不当な価格を消費者に押しつけているともいわれる。²⁰⁾

かりに、適正な価格で商品が入手出来るとしても、商品によっては到底われわれの生活の向上はもとより、これを健全に支えることが覚束ないことは繰り返して来た通りである。それ丈ではない。前にも述べた如く、資本主義体制下ではこの商品的交換関係は親しき友人関係の中に、家族集団の中に、夫婦関係の中に無遠慮に侵入して来る。そして、商品的交換では満し得ない筈のこれ等の人間関係を容赦なく損っているのが現状である。

これによって、われわれの道義感はもとより、美意識も、真理の基準さえも日々低下して行く。²¹⁾

しかし、このような商品的交換も亦ある条件の下ではわれわれの生活の向上に役立ち得ることは必ずしも否定する訳には行かない。事実、近代社会の当初には、それによって社会的生産力が増進せしめられ、少くとも当時の社会の一部の階層の生活を向上せしめたことをわれわれは知っている。すなわち、資本主義体制がそうであったように、それは十分その歴史的使命を果たしたともいえる。しかも、資本主義体制が最後のものでも、亦永遠のものでもないのと同様に、これに必然的に結びついて発生した商品的交換も、その永遠の支配を認める訳には行かないのである。

しからば、このタイプの交換がもたらす以上述べた様々な社会的害毒を阻止するにはその本源ともいう可き資本主義体制を直に一掃す可きであろうか。社会主義革命はむしろ、生産手段の私的所有を廃棄し、したがって又賃労働者を解放することを当面の目的として遂行されたのであるが、当然に商品生産とともに商品的交換もやがては廃滅する筈である。²²⁾

資本主義体制は長い間その商品的交換を通じて、人々の日常生活を支え、又それなりの文化を築き上げて来たのであるから、これから俄かに離脱することは政治的変革によって生産手段の所有を変更することに比してより多くの困難を伴うことは想像に難くない。したがって、資本主義体制を徐々に社会主義化して行くにしても、或は又、既に社会主義体制への移行を果している場合でも、この商品的交換の問題を如何に処理するかは大きな問題として残る。²³⁾

しかし、これはわれわれの当面の課題を超えるものであって、ここに商品的交換を交換条件の一つのタイプとして分析したのは、それは決して交換関係そのものを代表するものでもなく、且つ又、その無制限の支配が現代

社会生活の危機をかもし出す大なる原因の一つであることを指摘することに存したのである。

- (1) 内田義彦 経済学史講義 七頁
- (2) K. Marx- Zur Kritik der politischen Ökonomie S. XIII.
- (3) 加藤俊秀 マス・コミュニケーション 九十三頁
- (4) 家庭内の主婦の働きを金銭的に換算することでその値打を認めようとするのもその一例であるが、封建社会下で妻の働を評価しなかった場合はこれを金銭的に換算しないからではなく、女性一般を被支配者として平等の人格を認めないからである。したがって妻の働に報ゆる丈の愛情を示す場合がすくなかったということである。
- 大熊信行 家庭論 参照
- (5) 例えば、中国では貧乏から鉄を採取して農具を作製していると聞くが、これは近代資本主義の立場からは不生産的のように見えるても、その作出された農具はその農民に使用され、そこで支出される労働は私的企業に雇傭されている賃労働ではないことを顧る必要がある。それは資本主義的交換が媒介となっていないのである。
- (6) 封建体制下では主従関係の他に教育も亦一方が知識技能を授け他方がこれに報酬を支払うという交換関係でなく、英才を愛しみ育成する楽しみと師に私淑しこれを尊敬するという交換関係が成り立っていた。
- (7) 渡植彦太郎「私的所有と経済価値」商経法論双 第十二巻 第三号 三七頁
- (8) 内田義彦 前掲
- (9) 渡植彦太郎 前掲
- (10) 川島武宜 所有権法の理論 一七一頁
- (11) 渡植彦太郎 前掲 三十二頁
- (12) 川島武宜 前掲 一七四頁
- (13) プルガーコフ 社会主義社会における所有(上) 宇高他訳 三十一頁
- (14) ウイルバート・E・ムーア「経済と社会」渡植彦太郎 二四頁
- (15) 同上 四一頁

- (16) K. Soda- Geld und Wert 参照
- (17) S. Chase-The Nemesis of American Business, p. 2-4.
- (18) この場合所得は勿論近代的交換を前提とする金銭上の基準で計り、その自由も亦近代的交換における選択の自由から発しているものが大部分である。
- (19) W. H. Whyte-Organization Man, W. Mills-White Collar, D. Riesman-The Lonely Crowd. 参照
- (20) クイン デモクラシーの敵 武山泰治訳 三一頁、「アメリカ経済体制は人民資本主義ではないし、又かつどのような財産に基礎を置く体制でさえない。権力体制というのが現状である。」
- (21) この点に関する限り、大企業者も亦その災厄をまぬがれてはいない。この人々の外見的生活の華かさや、その物質生活の豪勢さに拘わらず、その精神生活がいかに貧困化しているかについてはバックカードの「ピラミッドを登る人々を」参照
- (22) カール・マルクスは資本主義体制下の生産手段の私有、したがって、又賃銀労働者の商品化に人間の疏外を見出したことは周知の事実であるが、労働力以外のすべての財貨、用役の商品化がここでは問題となっている。今世紀の初頭に既にヴェブレンの資本主義の批判はこの角度からであった。T. Veblen-Theory of Business Enterprises 参照
- (23) マルクス主義の社会主義革命は階級制の撤廃と同時に資本主義体制の廃棄でもある。資本主義体制以前の社会体制下でも原始共同体を除いては、階級制が存在したのであるから、当然階級対立による支配関係も亦存在したが、資本主義に特有な近代的所有を媒介とする階級支配は存しなかった訳である。したがって、社会主義革命は階級の支配を廃棄するために、資本主義的生産手段の私有を撤廃する必要に迫られる。しかし、依然として生産手段以外の近代的所有の問題は残されている。